り、其名たとひ賛たる言には非るも、負けたる意は賛たるものなり、故名を呼は尊みなり、然るに漢國にては、人の名を呼を不敬とするは、反の差なり、皇國にても後になりては、人の名を呼を不敬とするは漢のうつりなり、後のならひなり以て、古を疑ふことなかれ、

〔倭訓栞前編十九那〕なのり　日本紀に稱、又言をよめり、實名をいふ、名を告の義也、名告の字、古事記に見ゆ、なのるを體にいふ也、源氏にもなのりする人と見えたり、新千載集に、

九重やちかき守りのまとゐしてなのるを聞ば夜は更にけり、こは時まうしの事也、

〔名字盡〕名乘とは、夫人間の一心、魂の本性也、其ゆへに、是木火土金水の五行に合、名のるもの也、父祖の名乘をかたどるときは、上一字か下の一字を取る、是を通字といへり、

〔貞丈雜記二人名〕一名といふは、名乘の事也、字といふは、常によぶ名の事也、然れども日本には、あざなといふ物なし、唐人にばかりあざ名はある也、今日本にて、何太郎、何次郎、何兵衛、何左衛門、其外百官名の類は、字といふ物にはあらず、是をあざなと心得たる人あるはあやまり也、いにしへ文屋康秀が字は、文琳といひ、平貞文が字は、平仲、曾禰好忠が字は、曾丹といひける由古書にあり、是もたまたまの事にて、其比おしなべて、人々字ありしにはあらず、名字の二ッをわけて、くはしく云ふ時は右の如し、後世には、それまでの吟味もなし、名字といふ時は、たゞ人の名の事也とばかり心得べし、物の本を知ざれば、まよふ故記之、

〔韻鏡易解大全三頭註〕名字

倭邦間、誤有氏云名字者、今名字者、例如史記世家云孔子名丘字仲尼已上名與字、如次當倭國實名及假名也、又在家以實名多云名乘、故目錄云名乘分別等也、又如子孫忌辟祖父等存日名云之諱也、如韓退之諱辨述矣、倭朝却用先祖名字、示不忘其恩澤也、又世有詩人歌人等、假名實名外、稱風流號之輩云之齊名、又門人稱先生、不敢直穢其名字、如以處稱儒家、呼周茂叔於濂溪川名先生、佛家稱隋智者於天台山名大師等也、或儒稱氏、云程先生等、釋呼德云清涼師等、如是等類甚多、或又有廟號諡號、又有